

『山椒大夫』試論

—情念の不毛を拓く—

山崎 一 穎

(一) 『山椒大夫』執筆の経緯

『山椒大夫』（大正4・1、「中央公論」）執筆のモティフについて語ることから始めたい。『青年』（明治43・3と44・8）の中で、作家志望の小泉純一が

「書かうと思つてゐる物は、現今の流行とは少し方角を異にしてゐる。なぜと云ふに、その Sujet は国の亡くなつたお祖母あさんが話して聞せた伝説であるからである。この伝説を書かうと云ふことは、これまでにも度々企てた。形式も種々に考へて韻文にしようとしたり、散文にしようしたり、叙事的に Fabulet の三つの物語の中の或る物のやうな体裁を学ぼうと思つたこともあり、Maeterlinck の短い脚本を藍本にしようと思つたこともある」（二十四）

と語っている。恐らく純一の書こうとした伝説は、こゝへ山椒大夫伝説である。しかし、『青年』では坂井未亡人に誘われて箱根の福住

に来て見れば、夫人の前からの馴染である画家の岡村が先客としてゐる。そして純一は別離を決意する。その時「好いわ。この寂しさの中から作品が生れないにも限らない」（二十四）と、自らの空虚感を慰めるのである。この『青年』の純一の心中の独白には注釈を加える必要がある。まず創作の方向が「伝説」にあることを表明しながら、「寂しさ」を核とする創作とはかならずしも軌を一にしない。また、先の引用文中に「伝説を書かうと云ふことは、これまでも度々企てた」（二十四）とあるが、『青年』を読む限り、その根拠となる部分は見出し難い。この齟齬をどう解釈したらよいのか。

一方、『山椒大夫』が「中央公論」に掲載された大正四年一月に、この小説の舞台裏を語りながら、歴史小説の方法に関する脚注ともいふべきエッセー『歴史其儘と歴史離れ』を「心の花」に寄せている。その中で、

「まだ弟篤次郎の生きてゐた頃、わたくしは種々の流派の短い語物を集めて見たことがある。其中に粟の鳥を逐ふ女の事があつた。わた

悪感を持った所から確執が生じる。坊主憎けりや袈裟まで憎いの喩えのように、このような事は今日の職場にあっても経験することである。

『阿部一族』の場合以上のことに加えて、主君が死んだら恩顧を受けた武士は死を以て報ゆるという習慣法としての殉死が、実は理不尽な義理掛けであるかを弥一右衛門は身を以て示したと言える。次作の佐橋甚五郎と家康との対立の様は、支配者の政治力と権力を持たない被支配者の対抗の仕方が浮彫りにされている。これも組織中でピラミッドの頂点から下へかかる力関係の様相は、また今日の構造を持っている。

dionysisch に謳いあげた『興津弥五右衛門の遺書』で幕を上げた歴史小説は、現代史に近接させることによって『意地』を上梓した。鷗外が apollonisch な態度で歴史小説に取り組み始めたのは、『護持院原の敵討』(大正2・9)からである。この作と次作の『大塩平八郎』(大正3・1)を纏めて、第二創作集『天保物語』(大正3・5)として出版する。更に、鈴木三重吉編の『現代名作集 第二編』(大正3・10)に『堺事件』(大正3・2)と『安井夫人』(大正3・4)を収録している。恐らく鷗外が「歴史に縛られ」て「喘ぎ苦んだ」のは、『天保物語』以降ではなかったか。

封建的階級倫理の中で己れの職分を發揮したとて、結果としてそこにあるのは秩序内の階級意識や倫理の枠から自由になることは出来ない。彼等の情念の不毛さは如何ともしがたい。『護持院原の敵討』の九郎右衛門の行動が如実にそれを語っている(注2)。自己の置かれた状況や降りかかった運命に対して積極的に己れを提示し、己れの存在と自立の

様を展開してはくれない。武士階級に焦点を当て、歴史的事実を尊重すればするほど、階級や当代の倫理を超え得ないのは事実である。『大塩平八郎』で平八郎がその心中を

「準備の捗つて行くのを顧みて、慰藉を其中に求めてゐた。其間に半年立つた。さてけふになつて見れば、心に逡巡する怯もないが、又踊躍する競もない。準備をしてゐる久しい間には、折々成功の時の光景が幻のやうに目に浮かんで、地上に血を流す役人、脚下に頭を叩く金持、それから草木風に靡くやうに來り附する諸民が見えた。それが近頃はもうそんな幻も見えなくなつた」(五)

と披瀝する。平八郎内心の認識論と行為論との乖離は「兼て排斥した枯寂の空」(七)を感じざるを得ない。ぽっかり開いた心の空洞には、寒々とした風が吹き抜けているはずである。かつて、「上の驕奢と下の疲弊」(五)を見て、「此不平に甘んじて旁看してはをられぬ」(五)と世直しを欲した情念は、一時的にしろ「富豪を懲すことは出来た」(七)が、「切角発散した麗台の財を、徒に烏合の衆の攫み取」(七)りという惨憺たる結果を招来した。一方混乱と責任回避を決め込む奉行所において、玉造組与力同心支配、坂本鉉之助の働きは見事であるが、それとて上司の命令を絶対と認めての上での行動である。坂本は奉行所側の「指図の區々なのを不平に思つ」(六)たり、同心支配の広瀬が火急の場に於いても「体面」に拘わるのを批判する。与えられた範囲内で己れの職分を尽してはいるが、大塩平八郎の行為の意味については思いを至さない。あるいは何か思う所があったかも知れるが、そのようなことを考え

るのは範囲外だと思つていたかも知れない。坂本が己れを支えているのは「荻野流の砲術者」(六)という自負心であろう。

『堺事件』に於いても、明治政府や堺藩の事件に対する責任転嫁とその処置の仕方は論外である。鷗外は上から下へ責任を擦り替えて行く様を見抜いている。一方、兵卒らが正当だと信じて行動したその行動と「皇国のために一命を棄てる」覚悟とは、彼等のアイデンティティとなり得たであろうか。武士として「切腹」という死に方を要求した彼等の倫理は当然としても、最後に「士分のお取扱ひ」を願わずにいらぬその内心と「皇国のために」とは矛盾しないのか。フランス公使の退席によつて切腹が十一人で中断され、九人が免ぜられる。その後藩の処置が九人に流刑を申し渡した時、「我々はフランス人の要求によつて、国家の為に死なうとしたものである。それゆゑ切腹を許され、士分の取扱を受けた。次いでフランス人が助命を申し出たので、死を宥められた。然れば無罪にして、士分の取扱をも受くべき筈である」(傍点山崎以下同じ)と主張する。その時、彼等の頭の中には切腹した十一人をどう思つていたのであるか。その間隙を突いて「此度の流刑は自殺した十一人の苦痛に準ずる御処分であらう」と言われ、「論弁すべき詞」もない。鷗外は「堺では十一基の石碑を八御残念様」と云ひ、九箇の瓶を八生運様と云つて参詣するものが迹を絶たない」と記している。遂に「士分取扱の沙汰」が無かつた八生運様Vの生は八生運様Vと言るのであるか。彼等の死に向かつて発光した生の瞬間は再び訪れては来ない。切腹していった十一人は多かれ少なかれ、隊長の箕浦のごとく「フランス

人共聴け。己は汝等のためには死なぬ。皇国のために死ぬる。日本男子の切腹を好く見て置け」という心意気であろう。彼等が信じた「皇国」が彼等をこのような運命に陥れたことを見抜いてはいない。彼等の死をもつて購われた生の不毛さを鷗外は捉えている。

このように八武士Vを描く限り、彼等の情念は結局彼等の本然の姿となりえない。そこにはあるもどかしさを感じる。ここまで辿りついて、鷗外は今後いわゆる純然たる八武士Vを描くことを放棄する。いくら描いてもそれは不毛に終始するだけであることを悟ったからに他ならない。つまり、鷗外は人間の存在証明を殉死、敵討、暴動という非日常的な極限状況の中に見出そうとしたが、武士階級の倫理に縛られ、自立した人間の真相は遂に浮び上がってこないジレンマに陥つたのである。この鷗外のジレンマこそ「歴史に縛られ」て「喘ぎ苦ん」だ内実でなかつたか。わずかに階級倫理から自由であつたり、よにその原初の生を認めたと過ぎなかつた。この原初的な線上に『安井夫人』が構築されるのである。

学問は出来るが、大痘痕で不男な安井仲平(息軒)へ、岡の小町といわれた佐代が自ら望んで嫁いだ。仲平二十九歳、佐代十六歳であつた。そして鷗外は佐代の生涯を文末で、

「お佐代さんは夫に仕へて労苦を辞せなかつた。そして其報酬には何物をも要求しなかつた。(中略)お佐代さんが奢侈を解せぬ程おろかであつたとは、誰も信ずることが出来ない。又物質的にも、精神的にも、何物をも希求せぬ程恬澹であつたとは、誰も信ずることが出来

ない。お佐代さんには慥かに尋常でない望があつて、其望の前には一切の物が塵芥の如く卑しくなつてゐたのであらう。お佐代さんは何を望んだか。(中略)お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでゐたらう。そして瞑目するまで、美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれてゐて、或は自分の死を不幸だと感ずる余裕をも有せなかつたのではあるまいか。其望の対象をば、或は何物ともしかと弁識してゐなかつたのではあるまいか」

と述べている。明確に断定出来ぬのは、鷗外の心中にある保留があるためであらう。佐代の生涯はいわゆる良妻賢母型の婦道のそれと見られなくもない。しかし、自ら望んで嫁した佐代の心には運命と闘う積極的なものがあつたはずだが、それが見えて来ない。それを積極的に打ち出さなかつた所に『安井夫人』の切れの悪さを感じる。

己れの置かれた環境の中で、迫り来る偶発的な運命と闘う積極的な人間のアイデンティティを求めるとき、鷗外の心頭を掠めたものはかつて放棄した伝説を素材とすることではなかつたか。佐代の不透明さを超えるためには、一度飛躍する以外にならう。それは実在の歴史より非実在の伝説の方が実験し易かつたの言うまでもない。ここに十有余年前一度試みようとした八山椒大夫伝説がある必然をもつて小説化されるのである。小説『山椒大夫』は、このような経緯を経て生まれたのである。

(二) 説経節正本「さんせう太夫」から小説「山椒大夫」へ

鷗外が『山椒大夫』執筆に使用した原史料、説経節正本には字句の類似から今日では八寛文七丁未年五月吉日、山本九兵衛板の「さんせう太夫」であるとされている。この寛文七年版(注3)の構成は次の様になっている。

- 第一
- 第二 兄弟なげき并いせのこはきなさけの事
- 第三 三郎じゃけん并つし王おち行給ふ事
- 第四 兄弟わかれの事并ひじりせひもんの事
- 第五 つし王都へ上り給ふ并ひじり道行
- 第六 つしわう世に出給ふ并さんせう太夫さいごの事

説経節は奥州五十四郡の主、平正氏が帝の勘気に触れ筑紫の安楽寺へ流される。憂き目に遇つた家族が没落し、その母子が苦難を閲し、遂に子が出世すること、苦難に陥れた山椒大夫一族に復讐を遂げるといふ因果応報の復讐譚から成立している。それ故、子らの母は夫の身分を切り札に使うし、子の持参する系図と出世祈願が重要な役割を果す。そして出世の後、それに見合う形で山椒大夫一族に残忍な報復をする。説経節の作者もそのことを強調する。鷗外の『山椒大夫』は十四段から構成され、母子の別離から再会へとというドラマの中で演じられる子らの艱難に立ち向う姿に重点が置かれている。鷗外は初手から悪逆無道の運命に

積極的に対処する人間を造型する意図を以て、原典に対しては、それ故、この意図に沿って原史料の削除、改変がなされるのは当然である。

以前のように原史料を検討して、その中の△歴史の自然▽から作品を構築する方法を放棄し、ある意図によって原史料に臨んでいる。

鷗外の『山椒大夫』は次の様に構成されている。(括弧中の数字は段落を表わす)

第一部 山岡大夫に売られ、母と安寿・厨子王の別離。(1、2、3、4)

第二部 山椒大夫に買われた安寿・厨子王の艱難。(5、6、7、8)

第三部 悪夢が守本尊の加護で消えた後、安寿が厨子王に逃亡を催告。(9、10、11)

第四部 厨子王、曇猛律師の保護のもとに上京。(12、13)

第五部 関白師実の知遇を得て、佐渡の母と再会。(14)

これを説経節正本との関連で対比を考えると、ほぼ次の如くである。

△鷗外の小説の部立と説経節との関係▽

第一部……第一
第二部……第二、第三
第三部……第三
第四部……第四、第五、第六
第五部……第六

第一……1、2、3、4
第二……5、6、7

第三……8、(9)、10、11 (やや具体的に見ると、8 (9) 10 11 8 11、(9) は相当するものなし)

第四……12
第五……13の前半

第六……13の後半、14 (やや具体的に見ると、13の後半 4 11 14)

第一部の母子の別離までの経過を点綴するにあたって、まず物語の年立をする。説経節ではこの点が不明である。入水する乳人・姥竹が三三歳、安寿が十六歳で死んだことしか判明していない。鷗外は『歴史其儘と歴史離れ』の中で、「永保元年に謫せられた正氏が、三歳のあんじゆ、当歳のつし王を残して置いたとして、全篇の出来事を、あんじゆが十四、十五になり、つし王が十二、十三になる寛治六七年の間に経過させた」と述べている。

説経節が冒頭から正氏の地位を述べ、帝の勘気を蒙って筑紫の安楽寺に流謫されていることを語り、み台所、安寿、厨子王、乳人・姥竹が、厨子王の発議で父を訪ねる旅に三月下旬上ることから語り始められる。鷗外は小説の効果を考え、次の点に留意している。まず登場人物名を一切伏せ、母、姉、弟、女中らの一行が、紅葉の美しい秋日和に夫を父を訪ねての旅であることしか明さない。誰の発議からとも記していないが、家族みんなの願いとということであろう。そして四段の母子の別離の瞬間に、母が安寿・厨子王と叫んで、名が初めて明されるという劇的な

場面で効果を發揮している。次に母は三十路を出たほどで、姉は十四、弟は十二、女中は四十位であることを明示している。先の無名性と考える合わせると、イメージを構成する一助となっている。更に父についても、三段で山岡大夫の家に宿った晩、母が「夫は筑紫へ往つて帰らぬので、二人の子供を連れて尋ねに行く」としか語られていない。後に厨子王が都へ上り関白師実に会った時、初めて全様が明らかにされる。このように伏せ続けられて来たものが、時を得た瞬間に明白化され、劇的効果を生み出している。

説経節と著しい違いは山岡大夫の登場である。説経節が「人をうつてのめいじん。かどはかしての上ず也」と語り、大夫は一行に昼間宿借し損じたので見当をつけて応化の橋まで来る。案に違わず前後不覚に寝入っている。まずここは妖怪の出没する所だと威嚇して通り過ぎようとする。これを聞き止めて、み台所は「こしにあづさの弓をはり。じひ有げ成らう人」と見える山岡大夫に向かって「あれにふしたる兄弟は。あふしう五十四ぐんのぬしとならん兄弟也。都に上り。本地に帰りし物ならば。大夫殿に。何かしよりやうのをしからん。ひらに一夜とかり給ふ。」と頼むのである。大夫は「上らうのあまり御意ちかければ。なさけに一夜まいらせん。」と一行四人を家に連れて行く。大夫の妻からこっそり夫が人買、人売りであることを知りされ、まんじりとも出来ず不安な一夜を送ったと述べられている。

鷗外は山岡大夫が人買、人売りである事実だけを踏えて、説経節の一切を捨象している。応化の橋の下へ「這入つて来たのは四十歳ばかりの

男である。骨組の逞しい、筋肉が一つ／＼肌の上から数へられる程、脂肪の少い人で、牙彫の人形のやうな顔に、笑を湛へて、手に数珠を持つてゐる」(傍点山崎以下同じ)。そして「山岡大夫と云ふ船乗ぢや」と名告り、気の毒な旅人に宿を借すことにしていることを語る。子供らに「芋粥でも進ませせう」と、「強ひて誘ふでもなく、独語のやうに言つたのである」。いかにも慈悲心ありそうに数珠を持ち、食物を引き合いに出し、母心を牽引するあたり心憎いばかりである。これからの旅を「船路」を行くことを勧め、金銭も「船に乗れば舟の主に預ける」規則だと称して巻き上げてしまう。最後の瞬間まで人売りの正体を隠し続けている。

母親の造型は説経節では、身分に拘泥している。子との別離の瞬間「あねがかけたる。はだのまもりのぢぞうぼさつ。兄弟が身のうへに。しぜん大じの有時は。必身がはりに立給ふ。又つしわう丸が持たりし。いだ玉つくりけいづのまき物。それだにあれば。よに出るはぢでう也。」と叫ぶのである。それ故、この母の末路を

「有山ばたにつれてゆきて。手あしのすぢを切。あはの鳥をおはせる。いたはしやみだい所。思ひもよらぬしづかわざ。(中略)あはの鳥をぞをひ給ふ。あんじゆこひしや、つしわうこひしや、ほやれほう。鳥もしやうある物ならば。おはずと立てゑさせよと。泪の雨はたへもなく。つひに両がなんきつぶし。あけくれ鳥をおい給ふ。おふしう、五十四ぐんのぬし。みたい所のなれのはて。申はかりはなかりけれ」

と階級の没落ぶりを強調している。

鷗外の方は、母が人買が出没する故旅人を泊めてはならぬという高札を見て、「さう云ふ掟のある土地に來合せた運命を、歎くだけで、掟の善悪は思はない」人であると記す。更に「最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言ふ事を聴かなくてはならぬやうな勢」になり、「余儀ない事をするやうな心持で」船の人になる。愛情豊かで世間知らずでもあり、心弱い女人として造型されている。

一方女中の姥竹の形象は、説経節では山岡大夫が言葉巧みに誘う時も同席していて、為す術も知らない。み台所様と同輩扱いされては、み台所様に申しわけないという理由で死を選ぶ。主人思いの人柄は出ている。小説は白湯を貰って帰って来ると、山岡大夫の家に泊ることになっている。「不安らしい顔」で付いて行くが、結局この不安は舟に乗っても消えない。最後に預けた金の返却を言うが、その時船は引き離されてしまう。鷗外は姥竹を世間を多少でも知って、山岡大夫の胡散臭さをそれとなく感じている人物として造型しなおしている。死に臨んでも「あのお嬢様、若様に別れて、生きてどこへ往かれませう」という子らに対する愛情を素直に表わしている。説経節が主従という縦の関係から見ているのに対し、鷗外の方は愛情という横の精神的関係に置き替えられている。

第二部の安寿と厨子王の艱難の有様を描写するにあたって、前述のエッセーの中で、「山椒大夫には五人の男子があつたと云つてあるのを見た。就中太郎、二郎はあん寿、つし王をいたはり、三郎は二人を虐げる

のである。わたくしはいたはる側の人物を二人にする必要がないので、太郎を失踪させた」と述べている。補足するならば、説経節に登場しないハ奴頭Vを登場させている。説経節が、山椒大夫の前に連れて来られ、名を聞かれると、姉が己れの自尊心故に「ついきたまる名としては、御ざなく候。」と答える。国の名をとって、姉をハしのぶV弟をハわすれぐきVと名付けられる。鷗外の方は、茫然として口さえ聞けないので、姉をハ垣衣V弟をハ萱草Vと付けられたとしている。そして「垣衣は浜へ往つて、日に三荷の潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を刈れ」という点は、説経節とも変わらない。ここまでが五段、六段である。

七段めに入ると、説経節では次の如く語られている。

- (1) 山へ行つた弟は、山人が三荷とも刈って運んでくれる。
- (2) 三郎は初日の様子を見て、明日から十荷刈れと命じる。
- (3) 弟は姉を迎えに行き、姉に三荷にと詫を入れてもらう。
- (4) 二郎に頼み、詫びがかなう。
- (5) 三郎は柴勧進によると聞くと、山人に禁止令を出す。
- (6) 翌日柴を刈る術も知らず茫然として死を思い、一目姉に会いたいと浜に下る。
- (7) 姉も昨日は勧進を受けたので、今日は汲み様がわからず、弟とともに死ぬことを決心する。
- (8) 伊勢の小萩に助けられ、汐を三荷、柴を三荷整えてもらう。そして姉妹弟の約束をする。

鷗外はこの事実を踏えて七段を構成する。説経節の(2)と(7)を切り捨て、捨象の理由は、後に安寿・厨子王の運命に対する心構えを描写する時、この脆弱さやめめしさが邪魔になるからである。そして(1)(8)を改変する。奴頭を登場させ、頭に連れられて大夫の下から去った翌朝の状景を挿入する。三荷の柴のうち一荷を樵から勧進を受け、柴の刈り方を教えらる。一方、三荷の汐のうち一荷を小萩から勧進を受け、汲み方も教わる。そして姉妹の誓をしたと、(1)(8)を簡略にし整合性をはかっている。

八段に相当する説経節は次の内容を持つ。

- (1) 姉弟は正月を別屋に送らせられる。
- (2) 姉は差別だと憤慨し、弟に逃亡を勧める。互に譲り合っているのを、三郎に立聞される。
- (3) 大夫の前に引き出され、焼金を十字に当てられる。
- (4) 浜辺の船の中で食事も与えられず正月を迎える。
- (5) 二郎がこっそり食事を与える。
- (6) 正月十六日に山椒大夫の前へ引き出される。

鷗外はまず前段との時間の整合を考え、十日ほど経た後のことと設定する。新参者は小屋を明け「奴は奴、婢は婢」と分けられる規則についてふれる。姉も弟も死んでも別れないと言いつ張るので、二郎が大夫に「愚なものゆゑ、死ぬるかも知れません。(中略)人手を耗すのは損でございませう」と助船を出して一緒に住むことになる。説経節の「いみやいませの者こそは。べつやにをくと聞て有。何のいまれもなき者を。べ

つやに年をとらすは。」と激昂する安寿を削除する。安寿の内面的強さとという方向と逆行するからである。父恋し母恋しと言っては、逢いたさのあまりあらゆる手立てを夢想し語り合う二人を点描する。二人の話しを二郎に聞かれ「大きくなる日を待つが好い」と言われる。次に三郎に立聞きされる。そして、(3)の如く大夫の前で焼金を当てられる。鷗外はそれを夢の中の出来事に帰し、守本尊の地藏尊の加護によって疵が癒されるといふ具合に改変する。(4)(5)(6)は二郎の親切のみを生かしてすべからず削却される。

次に第三部を分析追求したい。説経節にない部分を鷗外は九段に挿入する。この独自の創作こそ、この作品の生命となっている。時間を年の暮から正月にかけてのことと設定する。ここでは恐ろしい夢を見た時から安寿は、厨子王にも小萩にも無口になり、時に不愛想になる。安寿の覚醒への萌芽を記述した箇所である。この安寿の変貌の意味については次章で論述したい。

十段に入ると、説経節は次の様になっている。

- (1) 姉が大夫に弟と一緒に山なら山へ、浜なら浜へやってくれと頼む。

- (2) 三郎に命じて、黒髪を切って山へやることとする。

鷗外はこの二箇条を生かしながら、安寿の胸に秘めた思いを増幅する。安寿が自らの山行きを二郎に頼み、三郎が「大童にして山へ遺れ」と命じ、奴頭が髪を貰いに来るといふ具合に展開する。

十一段に入ると説経節は次の様に展開して行く。

- (1) 地藏菩薩を取り出し、額の焼印を何故取り去って下さらぬかと愚痴を言う。
 - (2) 奇蹟が起り、疵は平癒する。菩薩に詫げる。
 - (3) このまま帰ったら又焼金を当てられると考え、元へ戻してほしいと願うが戻らない。
 - (4) そこで姉は弟にすぐ落ち延びよと勧める。
 - (5) 互いに譲り合うが、姉が弟の鎌を奪い、谷の方へ後ずさりをしつつ落ち延びることを強要する。
 - (6) 弟は逃亡することを諾し、別れの水盃を交わす。
 - (7) 姉は弟に近き在所を尋ね、寺を頼るようと言う。そして今日の薄雪では草鞋を逆に履き、杖を逆に持ちかえて行くようにと忠告をする。
 - (8) 安寿は大夫のもとへ戻る。
- 鷗外は(1)(2)を悪夢を見た八段の末尾に「地藏尊の額を見た。白毫の右左に、鑿で彫つたやうな十文字の疵があざやかに見えた」と記している。説経節に見られる姉弟の恨みがましい愚痴を削除している。(3)は当然除かれている。(4)(5)に見られる如く、落ち延びることを突然決意するようになっているが、鷗外はすでに安寿の心奥に確固たる信念となつて醜酔した結果として描いている。説経節でも安寿の弟に対する愛情の激しさは窮われるが、鷗外文では弟に説得的に説く安寿の理性に裏打ちされた愛情となっている。(6)はそのまま生かされている。(7)の前半は改変され、後半は省略される。この前半の改変は、安寿の内心の問題から派

生される。いずれにしても、この第三部を構成する九段、十段、十一段は作品の中核となる。安寿の運命に対処するその心的変化を描こうとする鷗外の意図に則つて造型されて行く。この第三部が説経節とは質的に異なっている。この点については次章で詳論したい。

第四部を形成する十二段、十三段を検討する。まず十二段を見ると説経節では次の様になっている。

- (1) 山椒大夫のもとに帰った姉は責め殺される。
- (2) 大夫を先頭に追跡する。
- (3) 逃げ切れぬと自害を思うが、思い止まる。
- (4) 里人に寺を教えられ、僧に匿つて貰う。
- (5) 僧は籠の中に隠し、籠を木に吊して置く。
- (6) 三郎は寺の中を捜し回わつて見つからぬので、匿っていない旨の誓文を説きさせる。
- (7) 三郎が木に吊り下げられた籠に目を付け、太郎が誓文があるからと止めるのも聞かず切り落す。
- (8) 地藏菩薩が金色の光を放ち、三郎目が眩み縁より落ちる。
- (9) 太郎もとのまま籠を木に吊す。
- (10) 三郎らすごすと引き返す。

鷗外は(1)を第三部十一段の末へ移し、次の様に記す。「後に同胞を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、此坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安寿の履であつた」。ここには説経節の残忍性は無い。(3)は落ち延びる弟の心は姉の心を体現しており、すでに弱さは消滅

している故に削除される。(4)は直接寺へ向って行くので、改変されている。逃げる道順は長い時間をかけて、安寿の心の中で描かれたのである。それ故行きあたりばったりではない。(5)と(10)は、すべて省略される。それは追手に対する僧の造型に独自性が加味されているからである。説経節では、おどおどしながら長々と誓文を説える。鷗外は曇猛律師と命名し、三郎らの追手の前に堂々と立ち塞がり一步も踏み込ませない。付け入る隙さえない。追手が歯みをしていると、鐘楼守が嘘の証言をする。一斉に指し示された方向へ移動し、後空しく引き揚げたと記している。

第十三段に相当する説経節の記述は次の通りである。

- (1) 籠から出された若君は、「いわきの判官正氏」の子であると名告る。
- (2) これまでの経緯を語る。
- (3) 追手を恐れた僧は、籠の中に隠し都へ行く。
- (4) 朱雀町の権現堂で出世祈願をする。
- (5) 権現堂で僧との別離にあたって、髪と衣の片袖を交換する。
- (6) 厨子王、清水寺に籠る。同日、梅津院が子供を得たいと祈願し籠る。
- (7) 梅津院、仏のお告により堂に籠っていた子を養子にする。
- (8) 厨子王、梅津院の養子として奏聞、公卿らの問責を受く。
- (9) しだ玉造りの系図を読み上げ、素姓が証明される。

鷗外は十三段の冒頭を「あくる日に国分寺から諸方へ人が出た。石浦

に往つたものは、安寿の入水の事を聞いて来た」という所から始める。(1)(2)は省略。(3)は「二人は真昼に街道を歩いて」という具合に律師の人間の大きさを窺わせる叙述になっている。(4)は省略。(5)は「守本尊を大切に往け、父母の消息はきつと知れる」といって別れることになり。この律師の言葉も安寿の精神に通ずるところがある。鷗外はエッセーの中で

「つし王を拾ひ上げる梅津院と云ふ人の身分が、わたくしには想像が附かない、藤原基実が梅津大臣と云はれた外には、似寄の称のある人を知らない。基実は永万二年に二十四で薨じたのだから、時代も後になつてをり、年令もふさはしくない。そこでわたくしは寛治六七年の頃、二度目に関白になつてゐた藤原師実を出した。／つし王の父正氏と云ふ人の家世は、伝説に平将門の裔だと云つてあるのを見た。わたくしはそれを面白くなく思つたので、只高見王から筋を引いた桓武平氏の族とした」と語っている。

鷗外は(6)と(9)までを次の様に改作する。

- (1) 関白が娘の病氣平癒のため清水寺へ参籠する。
- (2) 夢枕に寝ている童が良い守本尊を持っていると告げられる。
- (3) 目覚めると童がいる。
- (4) 身の上を明し守本尊を貸してほしいと頼む。自分は関白師実であると告げる。
- (5) 厨子王は「わたくしは陸奥椽正氏」の子で「父は十二年前に筑紫

の安楽寺に住つた切り」であること、母、姉のことを語る。

(6) 守本尊を手にした関白は「放光王地藏菩薩の金像」であり、これを所持しているからには平正氏が嫡子に相違ないと言う。

(7) 還俗の望みがあるなら、追って受領の沙汰もあらうと告げる。

ここでは説経節の中核をなす出世祈念、養子奉聞、公卿らの問責、系図等を一切捨象し、守本尊のみを身元証明の亀鑑とする。

第五部の十四段に移ろう。説経節では厨子王が世に出て、山椒大夫一族に復讐する段でその残酷な場面が繰り上げられている箇所である。安寿・厨子王の苦難の質量に比例して、その報復が為されている。鷗外は母子の再会に焦点を合わせている。まず構成について記して置きたい。

説経節が系図によって身元証明が為された時点で、厨子王は国守となる。そして母と対面する。それから匿って貰った僧を訪ね、安寿の行方を訪ねる。残酷な安寿の殺され方を知り、山椒大夫一族への復讐は陰惨さを加える。小萩と再会する。父母とともに本国に帰って栄えるという具合に語られる。鷗外は守本尊で関白師実の娘が本復し、厨子王を還俗させ、正氏の赦免状を持って訪ねさせるがすでに亡くなっていることから記述する。安寿の死はすでに十三段の冒頭で語られている。クライマックスを母との再会で結んでおり、その間に山椒大夫や曇猛律師や小萩のことが簡略に記されているという構成を持っている。

次に叙述について見て置きたい。説経節が国守になり、奥州五十四郡を賜わるが、辞退して丹後五郡を賜わるのは、明らかに厨子王の心の中に姉の行方を捜すことと、山椒大夫への報復の意志が働いている。鷗外

は厨子王は元服して正道と名告り、丹後の国守になったことを告げる。

この箇所について、鷗外はエッセーの中で

「山椒大夫一家に虐げられるには、十三と云ふつし王が年令もふさはしからうが、国守になるにはいかがいと云ふ事である。しかしつし王に京都で身を立てさせて、何年も父母を顧みずにするわけにはいかない。それをさせる動機を求めるのは、余り困難である。そこでわたくしは十三歳の国守を作ることをも、藤原氏の無制限な権力に委ねてしまった。十三歳の元服は勿論早過ぎはしない」と語っている。

国守となった正道は「丹後一国で人の売買を」禁止し、「山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を払ふことにした」ので、かえって産業が盛んになり、大夫一族も富み栄えた。鷗外は前記エッセーの中で「伝説が人買の事に関してあるので、書いてあるうちに奴隷解放問題なんぞに触れたのは、已むことを得な」かったと弁解している。説経節では、安寿の残酷な死を知った直後だけに山椒大夫一族を呼び出し、大夫を穴の中に首だけ出して埋め、三郎に竹鋸りで引き殺させる。三郎、四郎、五郎の首を刎ね、太郎と二郎のみ許している。鷗外は一切の残忍さを削殺している。鷗外は大夫一族が富み栄えたと述べた後に「国守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、国守の姉をいたはつた小萩は故郷へ還された。安寿が亡き迹は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つこととなつた」と記している。説経節では、匿って貰った寺へ国守が泊ると聞くや、僧は驚いて逃げ出す。やがて連れ出され、形見の品から再会を喜び

合う。僧の口から安寿の死様が「しやけんの大友三郎が。すいくはをあてゝせめころす。さらばしがひも取置か。爰のかやはらに手が一つ。かしのつゝしのかふにあし一つ。いぬからすが引あらせしを。ぐそらが衣のそでにひろひ入。くはそうにあげて候也。是くあねごの、しこつそりかみ也。」と語られる。また伊勢の小萩との再会を喜び合ったことが付け加えられている。小説『山椒大夫』は「安寿恋しや、ほうやれほ。厨子王恋しや、ほうやれほ」と歌い続ける旨しい老婆の前に正道は飛び込むのである。正道の捧げ持った守本尊の加護で両眼が開き、「八厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人はびつたり抱き合つたのである。

(三) 叡智による転生のドラマ

小説『山椒大夫』の眼目は、第三部九段、十段、十一段にある。この段は典拠と著しい相違を見せている。山椒大夫から焼火箸で十字の刻印を額に刻み付けられた事実を、夢の中の出来事に虚構化することによって、安寿の変貌が萌すのである。すでに述べた様に鷗外は運命と如何に対決し、そこにアイデンティティを見付け出したいという強い意図から筆を執っている。それ故に、九、十、十一段以前にすでにその端緒は伏線として配慮されている。小説の発端で越後の春日から今津へ抜ける街道を歩く様子を「姉娘は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも気が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出

したやうに弾力のある歩付をして見せる」(傍点山崎以下同じ)。という叙述に見られる如く、どこか意志的な側面を見せてはいる。しかし、山椒大夫に売られた翌日の朝「もうかうした身の上になつては、運命の下に、項を屈めるより外はない」と思い諦めの気持に追い込まれたのも事実である。典拠の自殺を決意する条を削除し、その弱さの替わりにけなげな思いを捜入したのであろう。

更に伏線部として重要なのは、二人が父母恋しい思いを募らせ、あらゆる手段を話し合う場面である。二郎から「佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢ひたいなら、大きくうなる日を待つが好い」と諭される。その後、安寿は「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出来ないと云ふのは、それは当り前の事よ。わたし達は、その出来ない事がしたいのだわ。だがわたし好く思つて見ると、どうしても二人一しよにこゝを逃げ出しては駄目なの。わたしには構はないでお前一人で逃げなくては」と厨子王に言つて聞かせる。説経節の安寿は、直情的で外発的な激しさを持った女として語られている。それに対して鷗外は安寿に「遠い旅が出来ないと云ふのは、それは当り前の事よ」と利発らしく言わせている。しかも「好く思つて見ると」に込められた思慮深さも注意したい。何よりも不可能を可能にしたいという激しさがある。しかもそれを実現するためには運命に対して、控えめでなくてはならないという予見さえ抱いている。この不可能を可能にする激しさは、出口なしの状況の中で夢想されているからに他ならない。閉塞状況であればあるほど、自由を夢想するのは当然である。

この安寿と厨子王の夢の如き会話を三郎に立聞きされ、烙印の悪夢を見るのである。九段の冒頭を「其晩恐ろしい夢を見た時から、安寿の様子、子がひどく変つて来た。顔には引き締まつたやうな表情があつて、眉の根には皺が寄り、目は遙に遠い処を見詰めてゐる。そして物を言はない」と記している。母恋しい父恋しいと、考えられるすべての可能性を模索するのである。勿論、出口のない状況の中での夢想は、それが窒息状態故に、流動的なたわいのないものが、徐々に思いつめるに従つて次第に確信に似たものになつてくるのは必定である。しかし、それは所詮幻想でしかない。それが幻想であればあるほど、あらゆる手立てを考慮するうちに実現可能な錯角に陥るのである。安寿の場合も烙印を押されたいう事実で幻から目覚めたのである。目覚めて見れば、実現不可能な苛酷な運命の下に組み敷かれていた現実をまざまざと認識せざるをえない。烙印を押されたことが夢でなく、それも近い将来十分起り得ると認識した時、安寿は自己の将来を見てしまった。安寿の遠くに注がれる目は何を見ているのか。今こそ不可能を可能にする決意と、その方策を模索する目であろう。鷗外は安寿の内面の苦悩の動きを描いてはいないが、自己の未来の運命を見てしまった人間の選択すべき道は、闘うか、屈するか以外にない。いずれにしても、安寿は運命と正面から対せざるをえない。そんな姉の心など弟の厨子王には理解が及ばない。無口な姉を見て、寂しく思うだけである。年が暮れて春になる頃まで、毎日心の中にあれやこれと具体的なプランを立てようと、一凶に思いつめていたに違いない。立ては消し、消しては立てるといふ具合に反芻したに違

ない。後に厨子王に「さつき見た川の上手を和江と云ふ所まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隠しておもらひ」と語る。勿論、一度も行ったことも見たこともない土地である。ただ小萩が故郷の伊勢から此地までの道を話してくれたそれをもとに、何度も／＼繰り返し心に描いて来た地図であった。

安寿の様子が二度めに變つたのは、早春になりいよ／＼外の仕事が始まる前日であった。二郎に弟と一緒に山仕事がしたいと願ひ出た時である。安寿の「蒼ざめた顔に紅が差して、目が赫いてゐる」のである。この時まで心の地図は完全に出来上つていたはずである。後は外に出る切っ掛けを待つばかりであつたと思われる。不意の安寿の願ひに厨子王は驚くが、その間「顔は喜に赫いてゐ、たし、三郎の命令で髪を切つて大童になることさえ、進んで応じた時も「安寿の顔からは喜の色が消えなかつた」のである。今の安寿にとって髪を切ることぐらゐに掛けたくなつてゐる。安寿とて黒髪を切られることの切なさは十分感じていたはずである。しかし、心の内に秘めた思ひの重さに比較すれば、髪に拘るのは見戯に類するほど大人びて、内心は高揚している。山へ出かける朝の安寿の様子は「毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を赫かしてゐる」とさえ記されている。

安寿の透徹した高次元にある内心は、どのような内実を持っているのだろうか。厨子王に向かつて、「わたし共は恐ろしい人ばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません」と

言つて、この土地を逃げ延びることを勧める。そして、「都へはきつと往かれます」とさえ言い切る。お寺に逃げ込みなさいと言われた時、厨子王が「でもお寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか」と不安げに問うた時、「さあ、それが運験だよ。開ける運なら坊さんがお前を隠してくれませう」と言つた後、「坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれませう」とさえ断言する。この時、「わたしにもさうらしく思はれて来ました」と言つた「厨子王の目が、姉と同じ様に、赫いて来た」のである。ここに展開されている安寿の運命に対する人恬然さVは、どこから生まれて来たものであろうか。物に憑かれたように自己の暗い悲惨な運命を見てしまった安寿が、心の中に繰り上げた絶望と希望との葛藤の末に到達した心境である。逃亡の地図を心の中に描きつつ、その可能と不可能との反芻の中で時には絶望の底に蹲り、心も凍てつくほどの苦悩を経た末の確信なのである。それ故、ただ運を天に任せるのとは違う。苛酷な運命に対して聴く賢しく闘つた末に開ける運なら当然開けるであろうという信念になっている。そして、今は人事を尽して天命を待つという心境にある故に、恬然としているのである。それは地獄の業火に焼かれ、七転八倒の苦しみの代価として獲得されたものである。

鷗外は八運命Vというものに早くから関心を持っている。『マアテルリンクの脚本』の中で、メーテルリンクの『智慧と運命』の思想にふれて、

「運命と云ふものは、前前にも申しましたとおり、避くべからざる、逃れやうのないものであるかのやうに、一応は見えます。(中略)

此の秘密らしい運命も、どうかすると明かに心に見えて来ることがあると云ふのでございます。さうすると運命が最早運命でなくなつて、自分の知り得る所のものになるのでございます。(中略) さう云ふやうに暗い運命を明かに見る力が即ち知慧としてあるのでございます」と語つている。即ち、運命は避くべからざるもののように見えるが、明智の人はその運命を自分で左右する力を持っている。恐らく安寿の叡智が自らの運命を拓くことになつたのである。

次に注意しなければならぬのは、運命を拓く段階に於て「姉えさん、あなたはどうしようと云ふのです」と問われた時、「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積でしておくれ」としか語らない。そして安寿の確信に満ちた言葉を聞くうち、「わたしにもさうらしく思はれて来ました」と告げる厨子王の目と安寿の目とが「同じ様に赫」くのであつた。ここに安寿の生は厨子王の生へ乗り移り、一人が二人となるのである。厨子王を見送つた後、安寿は覚悟の入水を遂げる。自己の運命に恬然たり得る境地にまで達した安寿が、何故に死を選ばなければならぬのか。苛酷な運命を突き破るためには、激烈な情念を必至とする。言うまでもなく死をも恐れない燃焼が必要である。鷗外は安寿の死によって覚醒した厨子王という形を取っていない。安寿の精神は死の前に厨子王の中に蘇っている。すなわち、ここに八転生Vが成就したのである。安寿から厨子王への転生が成就すれば、安寿の肉体は亡ぶのが必然である。そして、以後の厨子王は、自らの生と安寿の生とを一にして生きるのである。ここにはもはや情念の不毛さは見

られない。このように『山椒大夫』を造型することによって、鷗外の歴史文学は従来の壁をとにかく突き崩すことになったのは事実である。

しかしながら、鷗外は『歴史其儘と歴史離れ』の中で「兎に角わたくしは歴史離れがしたさに山椒大夫を書いたのだが、さて書き上げた所を見れば、なんだか歴史離れがし足りないやうである。これはわたくしの正直な告白である」と語っている。この文章の意味する所を考えたい。

鷗外は情念の不毛さを拓くべく、歴史離れVを試みたのであるが、「歴史離れがし足りないやうである」と自己批判をしている。勿論、「書いてゐるうちに奴隷解放問題なんぞに触れたのは、已むことを得な」かったことにもその原因の一端はあろう。しかし最大の問題は、八転生Vにあるのではなからうか。この点を再吟味しなければならぬ。すでに考察した如く、小説上では「厨子王の目と姉と同じ様に赫いて来た」と図式上では完成する。しかし、小説では安寿の変貌を描いて来たが、厨子王のそれについては触れていない。安寿が逃亡を勧める直前までの状況を「姉は胸に秘密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので」あつたと記す。安寿が塗炭の苦しみを経ているのに対して、厨子王にはそれが見られない。それ故、姉の精神の重さを受け入れる厨子王の側に、それを受け入れる強靱な精神の基盤が十分出来ていないのはやはり問題である。この点の書き込み不足が、やはり原因の一つになっているのではあるまいか。

更に安寿は別離の際「此地蔵様をわたしたと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ」と言っている。更に曇猛律師さえもが

「守本尊を大切に、して往け、父母の消息はきつと知れる」と言う。「きつと知れる」という言い方に厨子王は「亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊様だと」感じてゐる。まさに、この守本尊こそ安寿の精神の表象となつてゐる。この守本尊の靈験が、厨子王が世に出、父の消息が知れ、母との再会を導いて行く、地獄を見てしまった人間のドラマが、守本尊の靈験の中に吸収され、昇華されてしまつてゐる。ここに飛躍があり、今後の問題がある。この点も「歴史離れがし足りない」要因ではないか。

説経節正本を貫く因果応報の復讐譚を捨象して、安寿・厨子王の八転生Vを主軸に据え直した点で小説化に成功したと言つてよい。しかし、それを十全に完成させるために、守本尊の靈験という中世信仰を絡ませた点で、形而上の高次元にすり抜けてしまつたと言える。この飛躍による不十分さを「歴史離れがし足りない」という表現に象徴させたのではなかつたかと考える。鷗外の『山椒大夫』は情念の不毛を超える世界の構築のための実験小説であつたと言える。そして、この実験にはひとまず成功するが、それはやはり八伝説Vの世界のことである。生身の人間の演ずるドラマの中で、この実験の成果を確かめられなければならぬ。『ぢいさんばあさん』（大正4・9）の世界は、眼前に見えて来ているはずである。

(注)

- 1 この論証は難かしいが、『山椒大夫』執筆に影響を及ぼしているメートルリンクの思想について鷗外の講演がある。多少類推の材料となる。明治三十五年四月三日に竹柏会大会に於て、『マアテルリンクの脚本』について講演している。その筆記が、同年六月一日「心の花」第六巻第六号に載り、「歌舞伎」第三十九号(三十六年八月一日)、第四十三号(十二月一日)にも転載されている。なお「歌舞伎」第四十三号に於いては『脚本モナワソナの梗概』と題した。
- 2 「評言と構想」第10輯(昭和52年7月30日、浅川書店)掲載の拙論『護持院原の敵討』考』、二〇頁。
- 3 横山重・藤原弘校訂『説経節正本集』第一(昭和十一年九月十日、大岡山書店刊)所収の「さんせう太夫」に拠る。

—一九七八・一・二五—